

出光美術館

「没後90年 鉄斎 TESSAI」

◆鉄斎とは何者？

激動の幕末から明治・大正時代を駆け抜けた、近代文人画の巨匠・富岡鉄斎（1836～1924）は、当時の京都画壇において個性に満ちた作画活動をおこない、ひととき異彩を放っていた巨人です。生涯、学問の道を歩み、その傍らで余技の画に注心したと本人は主張しますが、実際には余技などではなく、本格的な画家としての自負心をもっていたものと思われれます。

学者ゆえ、彼の描く素材には常に精神世界が宿っています。たとえば熱狂的な勤皇家であった若き日より、移りゆく国際化への動向に背を向けて、祖国の精神の礎を深く理解しようとして、ひたすら古代日本の思想に接近しました。その手立ては、まず書物を読むことでした。その下で、鉄斎の座右の銘である「万卷の書を読み、万里の路をゆく」という実証主義の精神が、彼を旅の人に育てあげました。書

物に学んだことを、自らの目で確かめ、

自らの手足で体感しようとした類まれなる向学心こそ、鉄斎画の魅力を支える基盤となっております。

鉄斎にとつて、日々の読書は食事をとることよりもたやすく、まるで空気を吸うがごときものだったようです。書物と語らう。世俗の中で起る難題について自問自答することも、読書の中

は一種の快楽だったと思われるのです。その発露の一つが作画活動でした。

◆鉄斎画にふれる

自身の記憶を辿るように、鉄斎の描く画には、ほとんど賛文が書き付けられます。鉄斎が示す「儂の画を観るなら、まずは賛文から読んでくれ」という鑑賞法は、文人画であれば極めて当たり前のことなのでしようが、そうは言っても、鉄斎のような、これだけ



蓬萊仙境図 大正12年(1923)
88歳 出光美術館蔵

個性の強い画を見せられたなら、賛文を読む前に画の魔力に吸い寄せられない者はいなかったと思います。描きつづけることは、思考する自分を充実させるための運動のようなものだったのでしょうか。この両者が、あたかも車の両輪のような相乗効果を果たし、鉄斎画の魅力を生んでいます。

自信に満ちあふれた強烈な色彩、粘りのある筆運び、そして豪快な筆勢。絵筆は縦横無尽、自在に紙面を行き交いながら、前面を覆い尽くしてゆきます。その重厚な様相が鉄斎画の個性なのですが、かえってそのような灰汁の強さばかりが目立ってしまい、評価は二分されがちです。美術鑑賞の場では、評価や価値観の個人差が伴うことは当然ですが、鉄斎画を評価する時、どういう訳か、好き嫌いを超えた次元で、魅力のあり方が議論されているようです。大正期には「世界の鉄斎」と呼ばれるほど、近代日本画の中で鉄斎ブームのようなものが起こっていたのも事実です。

注目すべきは、八十歳を超えた頃から鉄斎画。水墨と絵の具の重なり合う濃厚な表情、鮮烈な色彩が不思議な光芒を放つ印象。実験実践とも呼べるような作画姿勢が八



明恵上人旧廬之図
明治34年(1901)
66歳 出光美術館蔵

十際代半ばになると、次第に薄らいでいきます。そしてその代わりに、清々しく透明感のある麗しい色調が突如生まれて、鉄斎画の新たな世界が開花したのでした。

◆老いてなお

鉄斎は中国趣味に没頭しながらも、中国には一切渡航しませんでした。そのかわりに自分の息子・謙蔵を漢学者として立派に育てあげると、秘書役として膝元に置き、自らの代わりとして中国に赴かせました。彼を渡航させては現地の事情を知り、中国の貴重な文物を入手し、著名な文人たちとの交歓をもサポートさせました。そればかりでなく、

国内各地の知友との連絡にも息子を頼りにしていました。こうした父子の二人三脚は、不幸にも鉄斎八十三歳の年、謙蔵の他界によって失われることとなりました。

しかし、鉄斎はこの苦悩をも学問を志す者としての試練とみなして、再起を決めたのです。どのような状況であっても、道を学ぶ者としての正義には忠実で、その意志を画業へと反映させたのでしよう。そして鉄斎ならではの、ダイナミックな画風は完成しました。大胆な構図が紙面に広がる大らかな印象の源です。大胆な筆運びに激しい筆勢が加わり、墨と淡い色彩とが滲み、織り重なりあいながら、独創

的なダイナミズムを具現しています。部分をみると、細やかな筆触が紙面を飾りながら、表情を整えています。これらが見事に融合したところに、深みのある豊かなマチエールは生まれています。

とくに晩年に描いた作品では、墨色の限界へと挑戦する姿が見て取れます。墨液の濃度を丁寧に変化させて諧調をつくり、幻想的な世界を描き示しました。墨という極めて難しい単純素材が、鉄斎の手にかかれば、いとも簡単なことのように感じられますが、それが彼ならではの超絶世界。研ぎ澄まされた繊細な感覚で扱われた墨は、透き通るほどに瑞々しい画趣をみせていま



蓬萊仙境圖 大正時代 80歳代 出光美術館蔵

す。こうした鉄斎画の真骨頂は、晩年に完成し、八十九歳までとどまることはありませんでした。九十歳を迎えようとする半年ほど前から、老いた彼の体には少しずつ、少しずつ衰えが見られるようになってきました。

「死ぬまで現役」をまさに貫いた鉄斎。本年はちょうど没後九十年となります。これに因み、出光美術館では企画展「没後90年 鉄斎 TESSAI」を6月14日より8月3日まで開催します。日本絵画の伝統を継承しながらも、新たな近代絵画の理想を追求しつづけた、彼の奇跡の画業に迫ります。まだ一般にはあまり知られてない出光コレクションの鉄斎書画ですが、その数、約八十件。国内でも屈指のコレクションです。今回は、五章分のテーマによって、近代画家としての鉄斎の実像と、画風の展開をご紹介します。

「没後90年 鉄斎 TESSAI」

会期：2014年6月14日～8月3日
会場：出光美術館
TEL：ハローダイヤル
03-5777-8600 (展覧会案内)
URL：http://www.idemitsu.co.jp/museum